



学院報

学校法人高知学園
高知リハビリテーション学院

学院報第9号

学校法人 高知学園
高知リハビリテーション学院

平成20年9月1日発行

発行

学院報編集委員会

〒781-1102
高知県土佐市高岡町乙1139-3
Tel 088-850-2311
Fax 088-850-2323
<http://www.kochireha.ac.jp/>
E-mail:kochi-reha@kochireha.ac.jp



開学四十年

学院長 中屋 久長

本学院はおかげさまで今年開学四十年を迎えることができました。昭和四十年理学療法士・作業療法士法が制定・公布され、その僅か三年後全国で三番目（盲学校専攻科を除く）、私学では初めて理学療法士養成施設として厚生労働大臣（当時は厚生大臣）の指定認可を受けました。現在、先発の国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院、労働福祉事業団九州リハビリテーション大学校はいずれも廃校となり、現存する養成施設では一番古い学校となりました。

本学院の沿革は多彩で、当初は同法人内の高知学園短期大学の衛生技術科（現医療衛生学科医療検査専攻）と共に短期大学の一学科で申請する予定であった。ところが、文部省（現文部科学省）にこの種の大学の設置基準がなく、やむなく厚生省管轄の養成所、つまり国の保護とは縁遠い私立の各種学校として、僅か一学年定員二十名、修業年限三年の小さな学校として開校、法人内の各校に助けられながら運営は短期大学の一学科扱いとして（専門専任教員一・二名、事務その他は短大との兼務）行われた。初代学院長は当時の学園長川島源司先生が兼任され「日に進まざれば必ず日に退く」、「今日の自分は昨日の自分ではないという進取な気持ちで進もう」の薫陶よろしく第一期生は未知のリハビリテーション医療に希望を膨らませて精進しました。

当時の高知県内のリハビリテーション医療は不毛の時代、先進県の口の悪い先生方の間では「リハビリテーションのチベット（現在

では問題発言）に理学療法士の学校ができた。」と不思議がられたほどでした。その中で、東奔西走し先進県の大学や病院から講師の先生方を探し、授業や臨床実習を具現化していたのが、第四代上村登学院長です。先生は、日本に居なければアメリカから若い新進気鋭の米国理学療法士「ミッシェル・アイズマン先生」を招聘しました。上村先生が常々言われたことは「於臨淵羨魚不如退結網（淵に臨んで魚を羨まんよりは退いて網を結ぶに如かず）」でした。何事にも準備が必要であると解釈し、川島、上村先生のお言葉をその後の学院運営のモットーとして心掛けています。

その後、開校当初から神戸大学医学部整形外科教室のご援助を受けていたこともあり、同教室出身の田中稔正先生（田中整形外科病院院長）に教授としてご就任いただけることとなり、やっと形が整ってきました。田中先生には以後三十数年にわたってご指導賜り、名誉教授の現在もご指導いただいております。また、先生のおかげで高知県整形外科医会の多くの先生方に授業を担当していただきました。中でも後に専任教授となった長田松義先生は本学院の名物教授として沢山の業績を残されました。

学院の歴史のトピックスは、先ず昭和五十年全国に先駆けて学部教育を目標に修業年限を四年制に、五十五年に専修学校認可（国は平成十七年専修学校制度三十年を機に四年制卒業者に高度専門士の称号を与え、大学院入学の道を開いた）、昭和六十二年、四年制を



理学療法学科第一期生

活かし、佛教大学通信教育部社会学部社会福祉学科（現在は人間総合科学大学と提携）と教育提携し、学士の学位を有する療法士の育成へ、平成五年、作業療法学科（四年制・定員三十名）を増設、同九年、言語療法学科（四年制・定員三十名）を増設し、リハビリテーション医療技術の三本柱が揃った。当時は未だ言語聴覚士法（平成十一年制定）は法制化されていなかった。

平成十年、法人理事会のご英断の下に更なる発展と将来構想の具現化を期し、校舎を土佐市に新築移転、各学科定員十名増、さらに平成十七年理学療法学科定員七十名に、開学当初の総収容数六十名から六百名と十倍増である。

「私学は常に二十年先を読み、他より十年先を走らなければ追いつき追い越されてしまう」正にそれを実践できたのは開学二十年頃

まで。現在理学療法士養成校は大学七十二校、短期大学五校、四年制専門学校八十六校、三年制専門学校八十一校、夜間専門学校五十校、盲学校専攻科三校、総定員一万三千人と急増・

乱立状態である。作業療法士・言語聴覚士の養成校も同様の傾向にある。特に大学の新学部・学科の台頭は著しく、十八歳人口の減少と養成校増は地方の専門学校には伝統や歴史、実績に關係なく、ギリ貧、冬の時代の到来を意味する。当学院はもとより、学園全体としてのビジョンを打ち立てて他校との差別化、伝統と実績を活かした改革が必要であり、法人内各校でも少子化他の対策が議論されているところである。

学院では教員の資質の向上と学生本位の教育・研究の向上の方策、専門領域の知識技術の修得、職域拡大方策など学生の付加価値を上げることにも取り組んでおります。現在までの卒業生は各学科合計約千五百名に達し、教育研究・臨床現場など各方面で活躍している。卒業後大学院への進学、修士・博士の学位取得への道の開拓、当然臨床療法士として実践力、臨床力の向上など、卒業教育の充実を図り卒業生を含めた総合的な学院の資質向上を図ることが肝要と考えています。

四十年の歴史を踏まえ、これを機会にさらに地域に根ざした学校づくりを後援会等のご理解、ご支援、ご協力の下に一步も二歩も前進し、四十年前の学院建学の精神が社会貢献できることを願ってやみません。

学生生活について

理学療法学科二年 戸梶 慎也

私たちの学院は、学生参加のイベントが多くあります。イベントには、学院祭やレクリエーション、よさこい祭りなどがあり、それらを通じて新しい仲間や、仲間との絆を深めていくことができました。さらに、日常生活から自然に生まれた挨拶を通じて、先生や先輩、後輩とも繋がりを持つことができ、人との繋がりをとても大切にしている特徴があります。

勉強では、高校生の時は机に座り、先生の話を聞くだけで、「教えられる」という要素が大きかったように感じるが、今では自分たちで考えたり、実践してみたりと、ただ机に座り話を聞くのではなく、「考えて学ぶ」というように、勉強へのスタイルが変わったと思います。

また、私たちの学院には多くの種類のサークルがあります。その中でも私は、野球部に所属しています。指導者や仲間にも恵まれ、テスト期間の忙しい時期にも練習や試合がありました。結果を残すことができ、全国大会（佐賀県）へ行くという大きな成果を得ることができました。

私の学生生活は、頼れる先生や明るく楽しい仲間がたくさんいるため、充実した楽しい毎日が送れています。

作業療法学科三年 米澤 知洋

高知リハビリテーション学院に入学して三年目となり、私たちの学生生活もとうとう残り半分となりました。三年生になると、より臨床に向けた勉強が主で、今まで勉強したことと応用になり非常に難しくなってきました。また、後期の評価実習や卒業論文の取り掛かり、国家試験に向けての対策など、日を追うごとに忙しさを増してきていますが、少しずつ自分の行きたい道がはつきりしてくることで、それに向けて頑張ろうという気持ちが強くなっているように思います。

学年が上がるにつれて、より専門的知識や

技術の学習が必要になってきます。そのため、施設への訪問やボランティアなどに積極的に参加することで、学校では学べない、より臨床的な内容を学ぶことができます。こういった活動が作業療法士としての夢の実現に少しずつ近づいているように思います。また、レクリエーション大会や学院祭などもあり、日々の勉強の息抜きという意味も込めて、クラス全体だけでなく、他学科や他学年、先生に至るまで学校全体で協力し、多くの人と交流を深める良い機会となっています。

このように、勉強や休息、対人交流などの大変なこともあります。非常に充実した学生生活を送ることができ、楽しく過ごせています。

言語療法学科一年 谷岡 沙紀

本学院に入学してから早くも半年が経とうとしています。徐々に学院の雰囲気にも慣れてきつつあります（正直まだまだ高校生気分から抜け出せていない部分もありますが...）。高校まではいつも先生や誰かが見守ってくれているという意識があり、ある意味とても安心していました。しかし、卒業してからはそれぞれが一人一人、自立していくことが大切だと思い始めました。私が思う学生生活とは、多くの人を知り、周りの人との関わり方を学ぶとても大切な時期だと考えています。学生という立場、そして学校という場所は社会の縮図だと思っています。多くの人と出会い、いろいろな経験を通じて成長していくのです。そして、学生生活の中での毎日を有意義に過ごしていくことが、立派な社会の一員になる練習だと感じています。社会に出て働き始めると、大きな壁にぶつかったり、今まで経験したことのないような出来事に出会うかもしれません。そのために今があり、どんな人に出会っても、どんな出来事に出会っても受け入れることのできる広い心を持つことが求められているのだと思います。私も、良いセラピストになれるように、一日一日を大切にしながら努力していきたいです。

高校生とのふれあい (オープンキャンパスで)

理学療法学科二年 宮崎 亜樹
私にとって迎える側の立場では初めてのオープンキャンパスが始まった。ちょうど二年前のことを思い出した。期待しながら見学しに来たことを覚えている。今日来る学生もきっとそんな気持ちなのだろう。

最初の学生が入ってきた。自分から話しかけて車椅子やストレッチの体験コーナーに誘ってみた。車椅子で段差を越えるためにキヤスター上げの体験をしてみもらった。自分でするよりも人に教えるほうが難しい。段差を越えることができるとう自分のことのように嬉しかった。ストレッチの体験コーナーでは筋肉やアキレス腱を伸ばし、ストレッチ前後で長座体前屈がどの程度伸びるかを測定した。友達以外の人にストレッチすることは初めてで、会話をしながら痛くない程度に力を加えるのは難しかった。

作業療法学科二年 上梶 智末
私はオープンキャンパスで、マクラメの作り方を教えるながら、高校生とふれあいました。その中には、高校生を作ることが苦手な人も得意な人もいて、教え方や接し方など、その人に合った対応の仕方を区別することが大変でした。また、今までは、自分が教えられた側だったので、今回のマクラメを教えるということは、とても難しく、言葉に詰まることも何回もありました。けれど、何人かの人に教えるうちにだんだん慣れてきて、スムーズに教える

ことができ、話す内容もどんどん頭に浮かんできて、楽しかったです。作業療法学科のことや学校行事のこと、クラスの雰囲気などの話をして高校生に伝えることで、「この学校に来たい」「作業療法学科に入りたい」という言葉をかけてくれることが何よりも嬉しかったです。そして、人に何かを教えることの難しさや、人と関わるのが楽しいと思えることが実感できたことは、今回のオープンキャンパスで私が得たものです。

言語療法学科二年 森 一起

今回、言語療法学科(以下、ST科)のオープンキャンパスでは施設見学・体験コーナー・写真を取り入れた学内生活の一年の流れなど二年次生が担当しました。体験して学んだことは、参加して頂いた方々に対して初対面の方とのコミュニケーションを取る事が非常に難しいという事でした。特に高校生は、高知リハビリテーション学院のST科の情報を知るために参加しているにも関わらず、質問に対して適切な受け答えが出来ていない場面も多くあったように思いました。また、高校生単独参加の場合は、実習棟のどこに行こうか迷っている時に、私たちの方から適切な声かけが出来ない場面もあり、このような時こそ、自ら声かけを率先して話しやすい環境を設け、少しでも参加者の方々にST科の魅力を知ってもらうため、主催者側の更なる工夫が大切だと思いました。しかし、高校生の質問に対して適切なアドバイスを与えた時は、とても良い表情をしてくれた場合もあり、その場の雰囲気が一気に和んだこともありました。その時が主催者側と参加者との距離が最も近づいた瞬間でもあり、非常に嬉しかったです。成功体験を覚えていきます。

今後、学校生活の中で、オープンキャンパスで学んだことを次に担当する一年次生に伝えることが大切だと思います。

教員紹介



理学療法学科
稲岡 忠勝

私は当学院の二十二期生としてやつとの思いで卒業させていただき、埼玉県の自治医科大学付属大宮医療センターで五年、高知赤十字病院で十年間理学療法士として勤務しました。そして本年四月より本学院の理学療法学科講師として勤務させていただくことになりました。臨床では施設の特徴上、主に急性期疾患に携わることが多く、その中でも内科疾患や心臓リハビリテーションに興味と関心を持って過ごしてきました。臨床の場で患者様のリハビリテーションに従事できることが大好きで、教育の場に身を置くことは殆ど考えていなかったもので、学院へきてみませんか?というお話を頂いたときにはとまどいと不安がかなりありました。もちろん入職以前はスーパバイザーやその他の場面で学生さんの指導にも何度か携わることがあり、教育・指導という面は興味がなかったわけではなかったのですが、いざ、それを根本から作っていく現場となると臨床の場で私が感じていた「ああすればいい」「こうすればいい」という持論をどうやら実行できるか、想像もつかなかったからです。しかしながら、学院のために少しでもいいかという思いが何か貢献できるのではないかとという小さな想いと元職場の上司や家族、友人のエールをもらって入職に踏み切りました。

私の学舎は高知学園短大の片隅にある狭い(すいません)校舎の中にありましたし、学生自体も全体で今の半分以下でしたので現在、他の学校に勤務しているような感じがしてしまいい、「高知リハに戻ってきた」のではなく、別の学校に来たような印象が否めませんでした。しかし、私が在校中にいらつしやった先生方や礼儀と愛嬌を重んじている校風を授業やコンパなどで目の当たりにしてなんとか実感を取り戻している最中です。



作業療法学科
川上 佳久

これからは内科学・循環器の講義を担当する予定です。そして臨床畑が長かった分、臨床経験をできるだけ講義に反映できるように、自分を磨いていきたいと思っています。何せ、現段階でも見るだけで生徒の皆さんやご家族、職員の皆様にご迷惑をかけることが多いと思います。ご面倒とは思いますが、気がついたことがありましたらご指導・ご鞭撻よろしくお願ひ申し上げます。

高知リハの特色(世界中で私だけ思っている?) 伝統と礼儀、愛嬌を大切にしながら学生と泣き笑いが共にできるようにがんばっていきます。

私は平成五年に香川にあつたリハビリテーション学院を卒業し、十五年が経ち、縁があり厚生年金高知リハビリテーション病院から本学院に転職し、四年目となります。

担当科目は二年次の身体障害評価学・手技、三年次の中枢神経障害(後期のみ)を受け持っています。以前の職場や経験上、授業は身体障害領域関連が多いです。どの領域もそうですが、学生は対象者のイメージが少ないため、自分の経験談も含めながら、少しでもリアリティーのある、分かり易い授業を心がけて行っているつもりです。ですがいつもどうすればもっとイメージし易いか、分かりやすいかなど考え、悪戦苦闘しつつ授業を行っています。また作業療法学科では今の学生の生活環境や特性を考え、他学年同士のグループ学習も展開しております。学生には評判が良いです。

現在は四年次生の副主任をしており、微力ながら学生の身体的、精神的サポートをしつつ、学生と一緒に成長しております。授業を通して「人や仲間を大切にすること」を

いつも言っております。思いやりの気持ちの大切さです。このことは全ての事に繋がると信じております。
今後とも御指導御鞭撻の程よろしく願ひします。



言語療法学科
吉村 知佐子

本学院言語療法学科を一期生として卒業後、徳島県の病院で六年間臨床経験を積み、昨年度から入職いたしました。私は、中学・高校も高知学園で学生生活を送り、十年間お世話になったところに帰ってきました。

授業は、一年次生の解剖学演習、二・三年次生の成人・小児系検査演習等を担当しています。また、本年度より一年次生の補導主任(担任)をさせていただき、諸先生方のサポートを受けながらクラス運営を微力ながら行っています。

四月、緊張しながら入学してきた一年生は、前期、初めてのセミナー活動、定期試験によるさこい祭りと大忙しい中、友情を深め、少しずつ成長しながら学院生活を送っています。私は、「他者を想うころ」。「知ることを楽しむ」を大切にしています。それを学生に伝えセラピストとしての社会性を身につけながら、よりよい学生生活を過ごせる環境を提供できるように日々精進していきたいと考えています。これからも皆様のご指導、またご鞭撻の程よろしく願ひいたします。

第十九回四国作業療法学会を終えて

第十九回四国作業療法学会 学会長
作業療法学科 講師

大塚 貴英

第十九回四国作業療法学会を、平成二十年六月七日・八日に、高知リハビリテーション学院及び高知市文化プラザかるぽーとにて、

「聴く・訊く・効く」作業療法士に求められるもの、これを「から」をテーマに、開催致しました。

学会参加者は二日間延べ六七二人と、四国四県の作業療法士と、関連他職種の方々が多数参加致しました。

本学院では、開会式をはじめ、一般演題・ワークショップを行いました。開会式・一般演題では、二〇〇名収容の合同教室から参加者があふれ、教室の外からのぞき込まなければならぬほどでした。各実習室や教室に分かれてのワークショップでは、どの会場も、参加者の熱気にあふれ、活発な討論が行われ、大盛況の内に学会を終えることが出来ました。また、学生も参加し、先輩作業療法士の真剣な姿に、作業療法士になるための、良い刺激を受けたと思います。

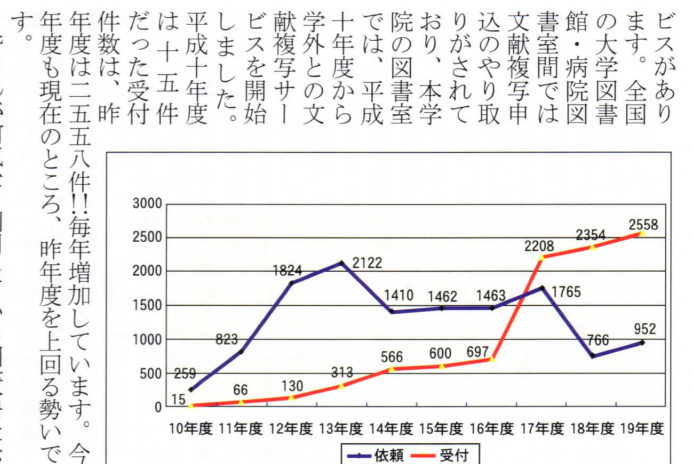


図書室だより

依光 朋子

四月から始まった新年度も、はや半年が過ぎようとしています。図書室では、今年も嬉しい悲鳴をあげています。何のことかと申しますと、文献複写受付の件数です。文献複写とは、新たに論文を書きたい、臨床の現場で調べたい時などに、資料として参考にした雑誌・図書に掲載されている論文・記事を複写するという作業で、自分の研究にとって必要な雑誌の一部をコピーするということです。三、四年生になると卒業論文や実習準備のため、文献複写をすることが増えることと思います。しかし、読みたい文献が全て図書室にある...という訳ではありません。その場合、他の図書館に依頼し、文献を取り寄せるという便利なサー

ビスがあります。全国の大学図書館・病院図書館・病院内図書室間では文献複写申込のやり取りがされており、本学院の図書室では、平成十年度から学外との文献複写サービスを開始しました。平成十年度は十五件だった受付件数は、昨年度は二五五八件!! 毎年増加しています。今年度も現在のところ、昨年度を上回る勢いで



皆さんが何気なく利用している図書室には、全国的にも必要のある貴重な資料があるのですが、譲り合っても大切に使いましょう。また、図書室の資料以外に必要な文献があれば取り寄せできますので、図書室のサービスを大いに研究に役立ててください。研究に必要な「これだ」という資料を探しあてられるよう、図書室も出来るだけバックアップしていきたいと思っています。

第31回 土佐大綱祭に参加して

作業療法学科 坂田 恭介

今年も土佐市主催の第三十一回土佐大綱祭りに無事参加することができました。毎年、ことながら、大きな綱です。編み上げるのも大変な苦労がかかったことでしょう。祭りが始まってすぐに大綱は使わず道路脇に参加者の椅子代わりに使われていました。道路を封鎖しての出店、餅投げ、太鼓の演奏と賑やかな催し物が目白押し。今年もなかなか



かの盛況ぶりです。そのなかで高知リハビリテーション学院として、よさこい祭りでも披露したよさこい鳴子おどりの参加をいたしました。よさこい祭り本番に比べると少人数が少ないものの、学生は笑顔いっぱい大いに張り切っております。しかし今日も暑い。途中小雨が降りはじめ、少し嫌な予感がしましたが何とか持ちこたえてくれていました。午後五時を過ぎると道路脇に横たわっていた大綱の登場です。祭りの醍醐味「大綱引き」の始まりです。子供部門と大人部門に分かれて行われた大綱引き。大人部門に高知リハビリテーション学院として学生チーム、教職員チームが参加をしました。結果は、まあよく頑張りました。暑い中ではあったものの楽しい時間を過ごし、来年もまた参加したい行事でした。



よさこい祭

梅原 有佳子

高校時代、友達に誘われたことをきっかけに私のよさこいの夏が始まりました。それから約十年間、踊り子として参加してきましたが、高知学園の職員になってからスタッフとして関わることになり、踊っているだけでは分からなかった裏方の大変さを痛切に感じました。衣装や鳴子の発注、氷、お弁当の買出し、移動バスの手配や許可の申請等、裏方スタッフ無くしてはできないお祭りだと思いました。

さらに今年は司令塔の役割を持つ地方車担当となり、いかに待ち時間の少ない競演場を探すかに頭を痛めたことでした。競演場では

現地係員に早く前に進むよう注意をうけ、学生には迷惑をかけました。
今年も難しい振り付けに学生は悪戦苦闘していましたが、踊る回数を重ねる毎に、上手になっていくのに感動したことでした。
途中ハプニングもあり右往左往しましたが、まわりのスタッフの方々の支えもあって今年も無事終えることができました。ありがとうございました。



レクリエーション大会を終えて

レクリエーション大会実行委員長 小川 誠也
理学療法学科二年

四月二十五日に春野運動公園でレクリエーション大会が開催されました。一年生にとっては本学院に入学して初めての行事です。今年の競技種目は、クラス種目はソフトボール、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、学科種目は綱引き、ドッジボールの全部で六種目の競技が行われました。どの競技のどの試合も、最後まであきらめない熱い試合が繰り広げられました。そのなかで私が特に印象に残っているのは、ソフトボールの決勝、PT三年A組対OT三年生の試合でした。どちらのチームも最後まで一歩も引かない、レクリエーションとは思えないようなレベルの高い壮絶な試合となりました。試合は同点のまま時間内に決着がつかず、勝敗はじゃんけんで決めることになり、その結果OT三年生が勝ちました。

野球部

野球部主将 作業療法学科三年 松浦 幹

総合順位は、一位PT三年A組、二位OT三年生、三位PT二年B組という結果になりましたが、どのクラスからも強いチームワーク力が感じられた素晴らしいレクリエーション大会になったと思います。来年は更に見ごたえのある思い出に残るようなレクリエーション大会にしたいです。



私たち軟式野球部は、一年六名、二年七名、三年六名、マネージャー二名の計二十一名で活動しています。練習は主に週二回学校の近くのグラウンドを借りて行っています。部員はほとんど経験者が多く一つでも試合に勝ちたいという気持ちと、野球を心から楽しみたいという気持ちを持って活動しています。学校生活やアルバイトなど忙しい時間の中で一人一人が課題を持って練習に取り組んだ結果、職場早起き野球大会一部リーグで念願の優勝を果たすことができ、八月十日に行われた高松宮杯二部の四国大会で全国への代表を勝ち取ることで、十月十日から佐賀県で行われる全国大会へ出場することが決まりました。さらに八月二十四日の職場早起き野球大会王座決定戦で二部代表の十市クラブを下し、一八三チームの頂点に立つ事が出来ました。



試合ではクラスの友達や担任の先生、保護者、事務員の方や学院長など、たくさんの方々が応援をしに球場まで足を運んでくれて、それが力となって私たちの支えになっています。野球部を応援してくれているたくさんの方々に感謝の気持ちを忘れず「元気に楽しく」をモットーに、一生懸命活動していきたいと思うので、これからも高知リハの野球部をよろしく願います。

剣道部創ろう

剣道部部长 理学療法学科二年 小島 保直



高知リハ剣道部は、この一言から始まりました。初めは冗談で言っていたものでしたが、話は次第に現実味を帯び始め、冗談はいつしか本気になりました。そして剣道部は創設され、僕が部長になり、剣道部の活動はスタートしました。

知っとうせ

《それから第8回の巻》

試験は何回あるの？

授業期間は二期制で、四月から八月初めまでが前期、十月から二月中旬までが後期になります。それで、前期の半年間に授業が行われる科目を前期科目、後期に行われる科目を後期科目、また一年間にわたり授業が行われる科目を通年科目といいます。

そして、この決められた授業期間の最後に行われるのが定期試験です。例えば、前期科目についての前期定期試験は七月末から八月初めの間に、後期科目と通年科目についての後期定期試験は二月に行われて、成績が判定されます。ただし、前期試験期間中には通年科目の中間試験が合わせて行われることもあります。

トしました。
剣道部は昨年末に創られましたが、本格的に活動し始めたのは今年からです。剣道部は毎週火曜日、高知リハの講堂内で練習しています。

創部当初、部員は五名でした。しかし、今年度が始まり、一年生を中心に多くの新入部員を迎え、今では部員数は十名以上になりました。中には全国大会を経験している者も数名おり、練習はレベルの高いものになっています。かといって練習がきついということはなく、剣道の経験がほとんど無い部員も一緒に練習しています。経験豊富な部員は自らの技量向上を図るとともに、経験の浅い部員の技量向上にも努めています。

まだ創られて日が浅い剣道部ですが、これからいろいろな活動をしていきたいと思っています。

しかし、病気や怪我などにより、どうしても定期試験を受けられなかったときに、欠席理由を証明できる診断書などを提出することで、受験のチャンスが与えられます。これが追試験です。そして、定期試験での点数が合格点に足りなかったときに、もう一度受けることができる試験が再試験です。再試験は年に一回で、三月の一学期にしか行われませんし、一度限りのチャンスです。

なお、授業に2/3以上の時間数を出席していなければ、その科目の受験資格はありません。そして全ての試験は、百点満点分の六十点が合格点です。また再試験については、一年間で十六単位(学年によって少し違います)以上の不合格があったときは、再試験は受験できません。なお、再試験では合格点以上の点であっても成績簿には六十点となります。また、追試験と再試験は有料です。

(教務部 山本)

全国で活躍する卒業生シリーズ⑨

作業療法の深さ

作業療法学科三期生

萩野 道代



私が本学院作業療法学科を三期生として卒業後、身体障害分野に身を置かせていただきながら、ほとんどの時間を訪問看護ステーションからの「訪問リハビリテーション」に携わってきました。訪問リハビリテーションは、作業療法士にとって非常に多くの可能性を含んでおり、今後の発展が期待されている分野です。学院の授業や臨床現場で、多くの先輩方から知識だけでなく熱い想いを学びながら、十年目を迎えた今、「作業療法士を選んで本当に良かった」と感じています。

現在私は、いの町立訪問看護ステーションに勤務しています。平成十六年に市町村合併をし、町立の訪問看護ステーションもその訪問範囲を拡大しました。同町内でも特性の異なる地域に訪問をしていると、文化や歴史、気候、コミュニティの違いがあり、個人の生活もそれらによって随分異なることを目の当たりにします。その中で個性性について考えさせられる機会が多くありました。訪問をする、ご利用者の生活場面にいるため、その人固有の動作方法や歴史を知ることができるだけでなく、人の数だけ動作方法があることも学ぶことができます。また、本人

にとって意味のあるアクティビティを見つけるヒントも多く、機能回復だけでなく、QOLの向上に向けたアプローチが可能です。残存機能とその人固有の生活をマッチングさせるためには、やはり作業療法士は必要なのだと年数を重ねることにますます感じるようになりました。最近では、地域で作業療法士の専門性を発揮できるようになるためには、その土地の文化と歴史をも積極的に吸収しながら、作業療法士自身がその地域に溶け込む努力をし、ジャンルに囚われない地域のネットワーク作りをしていくことが、選択肢を多く提示できるように第一歩に繋がるのだと思うようになりました。

新人の頃には、作業療法士の役割についてその幅の広さや社会の中の認知度の低さから戸惑いを感じたこともありましたが、日々の業務の中で役割と深さを学んできました。

訪問リハに携わる作業療法士はまだ少ないですが、この仕事と出会えたことときっかけをくださった本学院の先生方、先輩方に感謝をしながら、今後も『生活のスペシャリスト』を目指して勉強していきたいと思っています。

学院祭のお知らせ

実行委員長 作業療法学科三年

大石 綾美

今年も高知リハビリテーション学院の大イベント、学院祭の季節がやってきました。期日は十月十二、十三日。例年同様、実行委員会を中心に学生が主体となり企画を進めています。イベントは、毎年恒例のオーブンングの餅投げや、豪華景品のビンゴ大会、宝探しなどの外部の方々も自由に参加できるものから、クラス自慢や大食い・早

土佐市探訪 ④

宇佐しおかぜ公園

宇佐しおかぜ公園は、学院から車で東南へ約二十分の穏やかな漁師町です。宇佐といえ

ば、土佐の子供達が昔から潮干狩りや海水浴で慣れ親しんできた場所としても有名です。古くから高知県屈指のカツオの漁業基地として栄えたこの町には、釣り人に人気のフィッシングポイントも多く、毎年大人気のホエールウォッチングをはじめ、マリンスポーツ、マリネレジャーの拠点として多くの

人々に愛されています。この宇佐しおかぜ公園には長さ十三・六メートル、高さ七メートルの巨大な親子クジラのモニユメントがあります。ホエールウォッチングの基地らしく宇佐沖に多いニタリクジラが青空をバックに悠然と泳ぐ様は、仲々迫力があります。又この宇佐漁港はジョン・万次郎が仲間と共に漂流前に出港した所で、親子クジラの傍に「ジョン・万次郎ら漂流出航の浦」の碑と彼等を顕彰する看板が設置されています。

まさに雄大な海のステージの趣のある「宇佐しおかぜ公園」一度訪れてみてはいかがでしょうかでしょう。



食い大会、アームレスリングなどの学生が中心となつて行う舞台イベントや、バンドのライブ、学科紹介などがあります。また、屋台は、焼き鳥、うどん、かき氷、綿菓子、フリーマーケットなど、様々な出店が各クラスで企画されています。外部からは商工会、作業所土佐、つくし作業所の方々に参加していただきます。学生、教職員はもち

ろん、地域の皆様方にも楽しんでいただけるように学院祭実行委員会一同一丸となつて準備を進めています。イベントで笑って、美味しいものをたくさん食べて、お腹いっぱいになったのをたのしみと思えます。ぜひ皆様でお誘い合わせのうえ、お気軽にご来場ください。心よりお待ちしております。